

宮古島市内の海軍砲台について

久貝弥嗣、山口直美、菱木勇一、西里咲子、川満広紀、森谷大介

はじめに

2015年は、1945年に太平洋戦争が終結してから70年の節目の年にあたる。この節目の年に際して、県内では各地で戦争をテーマとしたシンポジウムや研究会が行われた。宮古島市においても、第10回宮古島市民文化祭郷土史部門において「戦後70年と宮古～次世代の宮古を考える～」と題したフォーラムが開催され、各世代や立場をとおしての戦後70年そして今後の展望などについて意見交換が行われた。また、フォーラムに関連して宮古島市内の戦争遺跡の巡検も行われ、親子やグループでの多数の参加があった。

戦争遺跡の調査としても、沖縄県立埋蔵文化財センターが、2010～2014年度にかけて戦争遺跡詳細確認調査を行い、2015年3月に『沖縄県の戦争遺跡-平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』を発刊した。この報告書の中では、県内の戦争遺跡が1,076カ所に及ぶことを確認するとともに、145の戦争遺跡について詳細な調査報告が行われている。沖縄県では、これらの調査成果を踏まえ、2015年度より戦争遺跡の文化財指定作業を着手するとしている。宮古島市においてもこの確認調査によって、10の戦争遺跡の詳細調査がおこなわれ、西更竹司令部壕が新聞報道されるなど、非常に注目をあびた^(注1)。このような戦争遺跡への調査研究がすすめられるとともに、戦争遺跡の巡検なども活発に行われており、戦争遺跡への関心の高まりを感じ取ることができる。

近年の宮古島市の状況としては、長南陣地壕群や、村越陣地壕群、イリノソコ陣地壕群にみられるように圃場整備工事で新規に発見される壕が増えてきている。また、アジア歴史資料センターのインターネット検索を通して、数多くの戦史資料を確認することができるようになったのも、戦争遺跡の調査を行う上での大きな環境の変化の一つといえる。

これらの状況を踏まえ、宮古島市教育委員会では2015年度に一括交付金事業 neo 宮古島歴史文化ロード『綾道』の戦争遺跡編の刊行にとりかかっている。この事業の実施に際して宮古島市教育委員会では、これまで報告されている市内の戦争遺跡の確認調査などを行うとともに、体験談を再整理し、聞き取り調査などを実施してきた。その結果、いくつもの壕の新発見があったことは大きな調査成果といえる^(注2)。

この調査を通して確認された戦争遺跡の一つに与那浜崎に設置された砲台がある。本砲台は、これまでの報告書の中でも紹介されていることはあるものの、その詳細が不明なものであった。報告者らは、本砲台に関する簡易的な平面図を作成するとともに写真などの記録作業を実施し

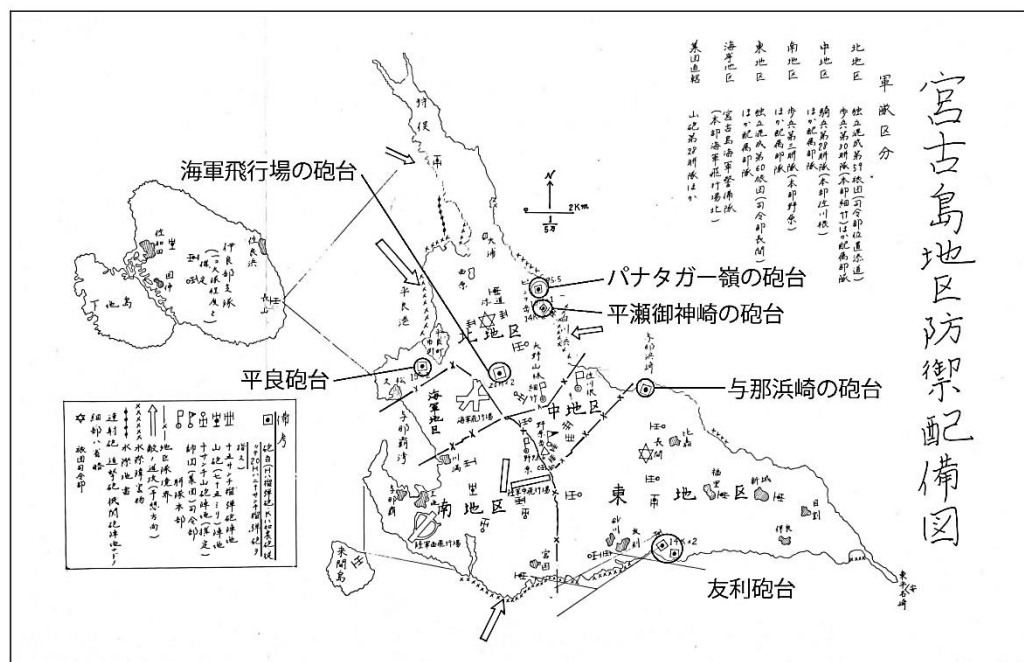
た。本論では、この与那浜崎の砲台に関する調査報告を行うとともに、その他の5つの海軍砲台についても再整理を行い、海軍砲台に関する歴史的背景について整理するとともに、砲台の形態の比較などを行っていきたい。

1. 海軍砲台の概要

(1) 海軍砲台とは

砲台とは、大砲などの火器を設置するための台座である。沖縄戦時、宮古島市内には六つの砲台が設置され、いずれも海軍に由来するものであったことから、海軍砲台と総称されている。宮古島市内には、これらの砲台とは別に、陸軍の山砲や榴弾砲を設置した壕として来間の山砲陣地壕や、牧山陣地壕などが確認されている。これらの壕は、いずれも石灰岩を掘りこんで構築するのみであるのに対し、海軍砲台は、砲台設置部分をコンクリートで構築しており非常に強固なつくりになっている。

海軍砲台は、当時の平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦戦を撃破する目的をもって配備されたとある(瀬名波編 1975)。本論では、この6つの砲台の名称について、それぞれの地域や地形などに由来して暫定的に「平良砲台」、「海軍飛行場の砲台」、「友利砲台」、「与那浜崎の砲台」、「パナタガー嶺の砲台」、「平瀬御神崎の砲台」と称して報告を行いたい。



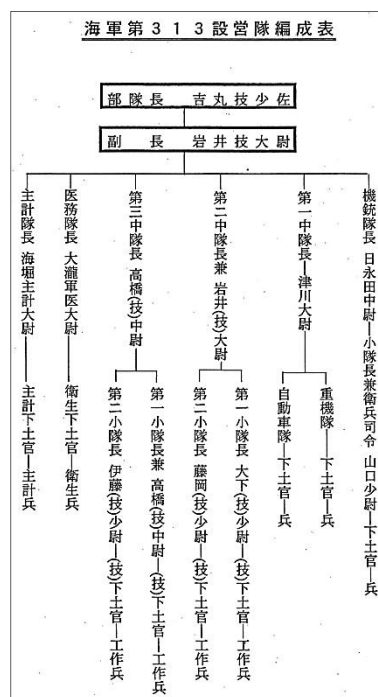
第1図 海軍砲台の位置図(瀬名波 1975年「宮古島地区防禦配備図」に加筆)

現在では、平良砲台と海軍飛行場の砲台は、その砲台跡の痕跡が残されていない。平良砲台については、戦争体験談などから現在のカママ嶺公園の位置する高台に掩体式の砲台が設置されたとされるが、海軍飛行場の砲台についてはその場所の詳細を示す手がかりがえられていない。友利砲台は、旧城辺町教育委員会によってその砲台跡が確認された砲台である。2005年に沖縄県立埋蔵文化財センターによって測量調査などが行われ、2基の砲台跡や弾薬庫、関連する壕を含めた「東保茶根の戦争遺跡群」という遺跡名で報告されている。パナタガー嶺の砲台は、従来「ピンフ嶺野戦重火器砲壕」として報告されている砲台である(沖縄県立埋蔵文化財センター2005、2015)。本砲台については、砲台の位置する嶺の名称が、パナタガー嶺であることが指摘されていたことも踏まえ、「パナタガー嶺の野戦重火器砲壕」とその名称の修正が行われている(宮古島市教育委員会2007年)。与那浜崎の砲台については、体験談などからおおよその場所が想定されていたものの、その詳細が未報告の砲台であった。今回、周辺の聞き取り調査なども踏まえ、その詳細な位置と形態を確認することができた。その一方で、平瀬御神崎の砲台については、その詳細や設置場所が明らかにされていない砲台である。

(2) 海軍 313 設営隊

海軍砲台の構築に際しては周辺の部隊や住民も動員されているが、砲台構築の主要部隊は、海軍 313 設営隊である。砲台構築に関する詳細については、各砲台ごとに後述し、まずその主要部隊である海軍 313 設営隊について整理していきたい。

海軍 313 設営隊に関する戦史資料は、簡易的な部隊編成が確認されるのみである(ref. C12122494800)が、この部隊の第2中隊第1小隊長の大下繁樹氏の手記『海軍 313 設営隊戦記と思い出』(以下、大下氏手記と称す)から同隊の宮古島での動向を読み取ることができる。この手記によれば、海軍第 313 設営隊は、昭和 19 年 7 月 1 日に広島県呉で編成され、8 月 31 日に呉を出帆し、9 月 14 日に宮古島に上陸している。海軍 313 設営隊は、吉丸藤吉技術少佐を部隊長に、大きく 6 つの中隊クラスで編成され、総勢 650 名(注3)からなる部隊である。宮古島上陸後、海軍 313 設営隊の本部(注4)は、現在の熱帯植物園から青少年の家の敷地内に壕の構築を行っている。この本部の壕群については、「海軍 313 設営隊地下壕群」としてその壕跡が確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター2005、2015)、その数は 30 基以上かなる宮古島市内最大規模の壕群である。本部以外としては、



第 2 図 海軍 313 設営隊編成表
(大下氏手記より)

第2中隊第1小隊はパナタガー嶺の砲台と平良砲台の構築へ、第2中隊第2小隊は城辺砲台の構築へ、第3中隊第1小隊は海軍飛行場へと配備されている。第2中隊第1小隊は、パナタガー嶺の砲台の完成後、狩俣にある特攻艇秘匿壕の構築にあたっている。この特攻艇秘匿壕は、現在の海中公園に隣接するヌーザンミという嶺に構築されており、「海軍特攻艇格納秘匿壕」という名称で、戦争遺跡としては宮古島市内では唯一の指定をうけた文化財である^(注5)。

大下氏手記によれば、海軍313設営隊は、海軍施設部のおかれた呉で編成されたことから、宮古島へむけての資材の調達には恵まれた環境にあったようである。4隻もの船にダイナマイト、木材、セメント、コンプレッサーなどを積載して宮古島へむけて出帆しており、陸軍の飛行場設営に際してはダイナマイト5トン^(注6)を陸軍からの要請により提供していることなどから、他の部隊に比して資材を豊富に有する部隊であったことがよみとれる。このような豊富な資材が背景にあったことから、短期間での各砲台や秘匿壕の構築が可能であったと考えられる。なお、大下氏手記の中にある城辺砲台については、その手記の中での砲台の位置を示した図から友利砲台に比定されるものと推察される。その一方で、与那浜崎の砲台と平瀬御神崎の砲台についてはその記述が見てとれることができない。平瀬御神崎の砲台については不明であるが、与那浜崎の砲台については、友利砲台と同じ城辺地区に位置している状況や、体験談・聞き取り調査の成果などから友利砲台の構築にあたった第2中隊第2小隊によって構築されたものと考えられる^(注6)。

(3) 大砲

次に各砲台に据え付けられた大砲についてみていきたい。各砲台に設置されたとされる大砲の種類を記した資料としては、『先島群島作戦(宮古篇)』、山砲兵第28連隊戦史資料(ref.C11110237800)、大下氏手記の3つがあり、それぞれに記されている各砲台の大砲を整理したのが表1である。これによると、平良砲台、海軍飛行場の砲台、友利砲台については、若干の違いが見られるものの概ね設置された大砲の規模や数をとらえることができる。その一方で、パナタガー嶺の砲台と与那浜崎の砲台についてはその種類も数にも大きな違いがみられる。これらの大砲については型式が不明であり、その詳細は不明である。また、大下氏手記のみ、大砲の単位の異なる非常に大型の大砲が設置されたとあり、その他の資料も含めて検討を要する。なお、那覇市当間海軍砲台には、現在でも大砲が唯一残る海軍砲台であり、重巡洋艦の主砲を転用したと思われる口径20cm砲が据え付けられている。

海軍砲台は、山砲兵第28連隊の指揮下にあり、各砲台に兵曹長以下25名からなる隊が充てられ、海軍砲台を扱う部隊として5隊^(注7)が編成されている(ref.C11110237900)。しかし、これらの隊に関する詳細については資料を確認することができず、友利砲台についてのみ体験談や聞き取り調査によってその利用部隊をしることができるのみである^(注6)。

表1 各砲台に設置された大砲の種類と数

砲台名	設置された大砲の種類				
	『群島作戦』		山砲兵第28連隊戦史資料		『海軍313設営隊戦記 と思い出』
平良砲台	15糎加農砲	2門	15糎加農砲	2門	14吋砲(戦艦の副砲)
海軍飛行場砲台	20糎榴弾砲	2門	短20糎榴弾砲	2門	
友利砲台	14糎加農砲	2門	15糎加農砲	2門	
バナタガー嶺の砲台	14糎加農砲	1門	10糎榴弾砲	2門	14吋砲(戦艦の副砲)
与那浜崎の砲台	14糎加農砲	1門	12糎榴弾砲	2門	
平瀬御神崎n砲台	12cm榴弾砲	2門			

2. 各砲台の概要

(1) パナタガー嶺の砲台

パナタガー嶺の砲台は、福山集落東の丘陵地であるパナタガー嶺(標高約 95m)の中腹部に位置する砲台である。パナタガー嶺の頂上部付近は琉球石灰岩で形成されるものの、嶺の下部においては、島尻層との不整合面も露頭している。この不整合面からは、水が湧き出ており、コンクリート製の舁に水をためている。また、その脇には、小規模な池も形成されている。パナタガー嶺の砲台の構築には、韓半島から強制連行されて



写真1 パナタガー嶺の砲台(砲台設置部分)

きた軍夫や近隣の福山集落在住の少年隊も駆り出されている。軍夫達は朝夕に「アラン」を歌っていたことからこの湧水地をアランガーと称している。

本壕は、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕口から砲門設置部分までは、約30m北へ直進した後、北北東に方向を変え約19m進む。すると砲門の設置のために壁面や天井部分がコンクリート造りになる。通路部分は、幅が3.1m、高さが2.7mほどと砲台をいれるために大きな作りとなっており、床面も丁寧に整地されている。この通路部分の途中には、左右に奥行2~3m程の小部屋が4つ設けられている。その内の3つの小部屋は、通路部分よりやや地下に下がるかたちで構築されている。コンクリート造りの部分は、ドーム型の形状をなしている。コンクリート部分は、戦後鉄筋がぬかれたために壁面が破壊を受け、床には、コンクリート片

が散乱した状態にある。コンクリートの壁面や天井部分には、構築時の板材の痕跡が明瞭にのこされ、当時の構築の様相をうかがい知ることができる。壁面の板材の幅は、0.25 cmである。天井部分には、0.3m×0.3mの方形型と直径0.3mの円形の空気坑が丘陵の上まで突き抜ける形で2箇所設けられており、途中までは、壁面をコンクリートで固めている。砲台は、東側、つまり白川浜を向いて設置されている。砲台が設置されていた場所の北側には、コンクリート造りの17段の階段が設けられ、着弾地等を確認するための窓へと通じている。

砲門は、白川浜の方向をむいている。これは、米軍の上陸予想地とされていた佐川根湾方面からの侵攻に備えるものである。本壕は、これらの当時の戦闘指導要領を伺いしる上で重要な砲台跡であるといえる。このような歴史背景や、良好な保存状態の点から宮古島市内の平和学習で訪れる機会も多い遺跡である。

(2) 友利砲台

友利砲台は、大きく東の砲台部分と、西の砲台部分、そして3つの壕で構成されている。西の砲台については、構築途中で終戦をむかえたとされる。

東の砲台の構築にあたっては、海軍313設営隊の他にも城辺青年団や周辺住民も砲台の構築をおこなっていたことが、体験談や聞き取り調査から確認されている。現在の城辺中学校の一带には、青年会場があり、そこには海軍の本部がおかれ、城辺青年団も寝泊りしながら友利砲台の構築にとりかかったようである。この海軍の本部については、海軍313設営隊の第2中隊第2小隊をさすものと推察される。また、仲原の公民館やアブチャー(通称・仲原洞穴)には、この砲台の資材が置かれていたとの体験談や聞き取り調査も確認できる。

友利砲台の利用については、宮古島海軍警備隊の江口隊(隊長・江口善太郎兵曹長)が指揮し



写真2 友利砲台(東砲台)の近景



写真3 友利砲台(東砲台)の弾薬庫

ていたようである。江口隊長は、仲原公民館近くに宿泊していたことが体験談や聞き取り調査から確認されており、5月4日の英太平洋艦隊による艦砲射撃に際しての友利砲台の指揮の状況なども確認できる(注8)。

次に砲台の形態などについてみていきたい。東の砲台部分は、弾薬庫と砲台部分が交通壕でつながれている。弾薬庫は、岩盤を掘りこみ、内部をコンクリート造りで補強している。入り口部分の幅が約0.9m、高さ約1.7mで、西側を向く。入り口部分には、本来扉のようなものが設置されていたと考えられる金属の突起部が複数確認できる。内部は、両辺の長さの異なる長方形を呈し、長い方は約7.4m、短い方は約6.0mをなし、両辺に幅約0.15m、深さ約0.05mの溝を有している。入口の対辺は約1.9mをなす。内部の断面形はドーム型をなし、高さは1.9mである。この弾薬庫から砲台へむけては岩盤を掘りこんで交通壕が構築されている。弾薬庫前も最大高で約5m近い岩盤を掘りこんで広い空間をつくっている。この手前部分には、2つの石積みを確認できる。いずれも高さが約1m未満であるが、石灰岩礫とともに、麻袋に入れられていたようなコンクリート片も数多くみられる。

交通壕の砲台近くには、掘りこんだ岩盤の幅2mを端渡すように約30cmの幅でアーチ型つくりのコンクリート施設が構築されている。弾薬庫側の口は頭大ほどの石灰岩の石積みでふさがれた状態にある。コンクリートでアーチを作るなどの技術を用いられていることから何らかの機能を有していたと考えられるが、その用途については現在のところ判然としない。

砲台は、終戦後に破壊されたと思われる、現在では大部分が瓦礫に埋まった状態にある。しかし、コンクリート造りのドーム型施設の天井部分や入り口部分などを部分的に確認することができ、砲口は、西南西を向く。岩盤を掘りこんだ後にコンクリートで施設を構築している。コンクリート造りの施設の幅は分からないものの、奥行は約7.0mと推察され、内側の幅は約3.8m前後と推察される。コンクリートの幅は約0.5～0.6mと非常に厚く強固なつくりであったことがうかがい知れる。現在は、ほぼすべてが瓦礫に埋まった状態にあり、交通壕との連結が判然としない。しかしながら、砲台の両端の岩盤にはコンクリートの付着が見られることなどから、砲台の北西側に交通壕から砲台への入り口が設けられた可能性もある。今後の発掘調査でその形態を明らかにすることが望まれる。

砲台の西側30mの場所に、コンクリート造りの貯水池が確認でき、東の砲台に関連する施設と考えられる。貯水池は、長さ4.2m×2.2mの長方形をなし、中の両端1.2mは約0.7mの深度であるが、中心部は約2.0m以上の深度を有している。現在は腐葉土がへドロ状に堆積している。

(3) 与那浜崎の砲台

与那浜崎の砲台は、長間底海岸を望む標高80mの与那浜の突端部(与那浜崎)に位置する砲台である。城辺の北海岸をまわる県道83号線沿いからユースヌス御嶽へ向かうように農道へ入ると、現在はサトウキビ畑が広がっている。サトウキビ畑から北側部分は海岸へむけての急崖をなしており、砲台はこの急崖部分の石灰岩を掘りこんで構築されている。そのため、砲台直上

は、現在のサトウキビ畑として利用されていることとなる。

与那浜崎の砲台の構築にあたっては、海軍313設営が中心となり、山砲兵や住民もかかわっていることが確認される。山砲兵第28連隊の第7中隊神田文男の体験談『遙かなる宮古島』によると、第7中隊の一部は比嘉の集落に幕舎を設け、与那浜崎の砲兵陣地構築にとりかかったとある。また、体験談などから、比嘉や西城の住民も砲台の建築にかりだされたことが記されている。

砲台構築後に、具体的にどの部隊が砲台を管理・使用したのかは資料が非常に少ない状況である^(注6)。しかし、山砲兵第28連隊の戦史資料(ref. c11110237800)によると「與那浜砲台十二榴二門」とあることから、与那浜崎の砲台には12榴榴弾砲が2門設置されたことになる。体験談によると何十発か実際に撃っていたようである。

現在、砲台へ出入りを行っているサトウキビ畑からの急崖部分にあく壕口は、本来の砲口であったと考えられる。砲口部分も含め、砲台は全体的にコンクリート造りの強固なものとなっている。砲口は、ほぼ真西をむいており、前面には長間底海岸を望む。砲口の大部分は、多量の土砂が流れ込んでおり、その全体像を確認することができないが、砲口部分の幅は現況としておおよそ5m前後で奥行は6～6.5mにも及ぶ。土砂の堆積が厚いため詳細な高さを計測することはできないが、天井までの高さは、2m以上に及ぶことは想定される。砲口部分から約6.5m東進すると南東側に壕が折れ曲がりコンクリートのアーチ型の作りとなる。約4.3m進むともう一つの壕口にいたり、本来の出入り口がこの壕口から行われたものと考えられる。この南東側に折れ曲がったアーチ型の壕内には、左右に1つずつ小部屋へむかう出入り口が設けられている。北東側の小部屋はコンクリートづくりで、五角形の形態をなし、天井部分もアーチ型をなし最大高は約3mほどと非常に高い作りとなっている。小部屋の出入り口は幅約1mで、高さは約1.6mあるが土砂の流入が及んでいる。内部には戦後のビン類の破片が多く散乱し、壁には落書きもみられる。この小部屋については弾薬庫としての機能も想定される。一方、南西部分の小部屋は入り口部分こそコンクリート造りとなっているが、通路部分は石灰岩が露頭した状態にあり、崩落の危険性も高い場所である。通路の壁面の一部には石が積まれている状況もみてとれる。この通路は、緩やかに湾曲し、コンクリート造りの観測用の窓へといたる。観測用の窓へいたる手前(南側)には、幅約1.7m、奥行約1.2mの掘り込みが設けられている。観測用の窓の設けられた部屋は、現在石灰岩が詰まった状態にあり、天井までの高さが1.1mと非常に狭く感じるものの幅は約1.1mである。観測用の窓が砲口とほぼ同じ真西を向いて設けられている。

『先島群島作戦(宮古篇)』によると長間底海岸は、上陸が予想されていない。しかし、長間底海岸の北側の突端部分にも増原高射砲陣地がもうけられており、与那浜崎の砲台と同様に



写真4 遠景（長間底浜より。←の場所が砲台）



写真5 壕口（砲口と推定される）



写真6 壕内



写真7 小部屋（弾薬庫か？）



写真8 観測室内部



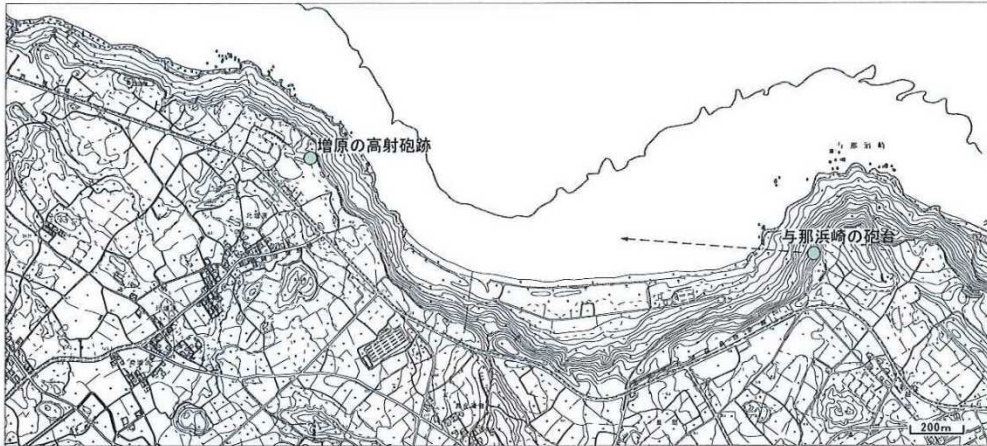
写真9 観測用窓



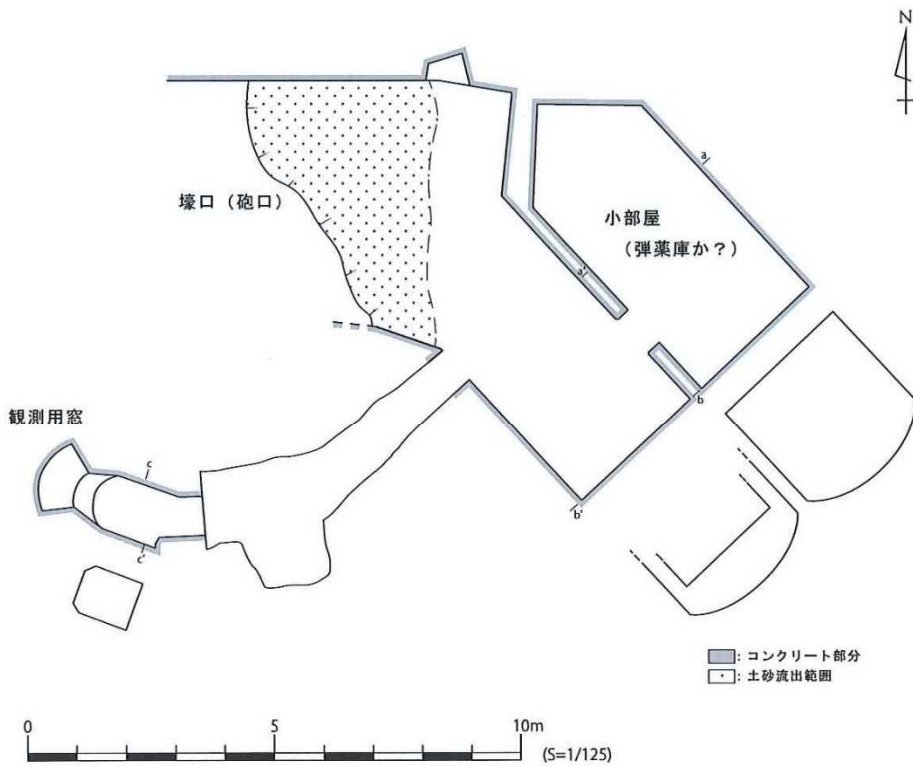
写真10 砲台から見た長間底海岸



写真11 壕（銃眼？）



第3図 与那浜崎の砲台位置図 (←は砲口の推定方向)



第4図 与那浜崎の砲台平面図 (1/125)

長間底海岸一帯からの上陸に備えて設けられたことがみてとれる。また、ここで報告を行った与那浜崎の砲台の東へ約20m進むと、コンクリート造りの窓が1基確認された。窓への入り口は現在のサトウキビ畑の中にあると想定され、現在はその壕口を確認することができず、内部へ入ることはできない。今後は、同施設の砲台との関連性についても調査を進めていくことが必要である。

3. まとめと今後の課題

現在確認できる海軍砲台3基の概要について整理を行ってきた。3つの砲台の内、パナタガ一嶺と、与那浜崎の砲弾は、石灰岩を掘りこんで壕内に大砲を設置する掩体式の砲台といえる。その一方で、友利砲台は、石灰岩を掘りこんで構築するが、大砲を格納するまでの石灰岩の丘陵を有していないことから、掩体式ではなく、天井部分を偽装するなどの方法を用いているという点で前2者の砲台とは違いがみられる。平良砲台についても、友利砲台と同様の形態を呈していたことが体験談などから読み取れ、これらの違いは立地上に起因するものと考えられる。しかし、現在確認できる3つの砲台は、砲台を設置する台座周辺を鉄筋コンクリート造りの非常に強固なつくりをなしている点で共通しており、友利砲台の東砲台の状況を見る限り、コンクリートの厚さは約60cm近くにも及んでいる。これだけの強固な構造物は、宮古島市において海軍砲台の他に、中飛行場戦闘指揮所などに限られており、海軍砲台の有する戦略上の意味は非常に高かったものと考えられる。さらに、鉄筋コンクリート造りの形態は、3基ともドーム形をなしており、非常に精巧なつくりをなしている。これらの共通点は、3つの砲台を海軍313設営隊という同一部隊の構築した大きな要素として捉えることができる。

今回の報告を行った砲台の中で、その場所や詳細が全く確認されていない砲台が平瀬御神崎の砲台である。本砲台については、『先島群島作戦(宮古篇)』や、宮古島市総合博物館収蔵の沖縄戦時に米軍が作成した地図上にもその位置がマークされていることから、砲台としての認識されていたことは確かであるといえる。しかしながら、山砲第28連隊の戦史資料や、大下氏手記にもその記載が全くみられず、体験談からも本砲台に関する情報は得られていない。今後、本砲台に関する確認調査をさらに進めていく必要がある。

謝辞

与那浜崎の砲台の各部屋の機能などについては、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭氏からご教示いただくとともに、友利砲台の場所の特定には、立津義康氏らの多大なご協力のもとに確認を行うことができました。末尾となりますが、記して感謝申し上げます。

【注釈】

注1 西更竹陣地壕については、琉球新報2015年6月8日、宮古新報2015年6月9日、宮古毎日新聞6月9日付の朝刊で新聞報道されている。

注2 埋文センター2005年以降に新規に発見された戦争遺跡として砂陣地壕、サズガーガー陣地壕、長南陣地壕、福嶺陣地壕、村越陣地壕、西更竹司令部壕、伊良部陣地壕、自衛隊基地内の壕、宮原増原高射砲壕、山田陣地壕、長南陣地壕II、ウズラ嶺陣地壕、宮原地下壕群(追加)、タキグスナル地下壕群(追加)の概要報告を、2015年10月29日の2015年度第2回沖縄県地域史協議会研修会にて報告した。

注3 『海軍313設営隊戦記と思い出』の本文第1章の中には650名とあるが、巻末の「海軍313設営隊(宮古島)戦記を記するにあたり」の中ででは550名とある。

注4 海軍313設営隊の本部には、部隊長、副長、軍医長、主計長、伊藤小隊長(第3中隊第2小隊)、第1中隊が駐屯している。また、本部の近くには機銃隊の対空機銃陣地がもうけられたとされる(参考：大下)。

注5 2004年4月15日に、旧平良市の史跡に指定されている。

注6 宮古島市史編さん室収蔵の霧生藤吉郎氏提供資料によれば、与那浜崎の砲台の構築は、海軍313設営隊第2中隊第2小隊が行ったとされ与那浜崎の砲台には海軍警備隊の長野隊が、友利砲台には、江口隊があったとされている。

注7 5隊とされているのは、山砲兵第28連隊の戦史資料においては、平瀬御神崎の砲台に関する記載が見られないことから、この平瀬御神崎の砲台を除く5つの砲台について述べられているからである。

注8 宮古毎日新聞2015年10月29日中野隆作氏投稿「戦争を再びしてはならない」によると、5月4日の艦砲射撃に際して、友利砲台は艦隊に非常に近い位置にあったものの、砲台からの発砲はされなかったとある。

【参考文献】

- ・大下繁樹『海軍第三一三設営隊戦記と思い出』 ※発行年不明
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)-宮古諸島編』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2015年 『沖縄県の戦争遺跡-平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』
- ・神田文男『遙かなる宮古島』 ※発行年不明
- ・瀬名波栄編 1975年 『先島群島作戦(宮古編)』
- ・宮古島市教育委員会 2007年 「宮古島市が誇る宝(文化財)の散策マップ」
- ・佐山二郎 2012年 『日本陸軍の火砲 野戦重砲騎砲他』 潮書房光人社
- ・ref.C11110237800 戦史資料 山砲兵第28聯隊
- ・ref.C11110237900 戦史資料 山砲兵第28聯隊(宮古島)
- ・ref.C12122494800 15.沖縄方面部隊

※ref.は、アジア歴史資料センターのレファレンス資料番号を示す。